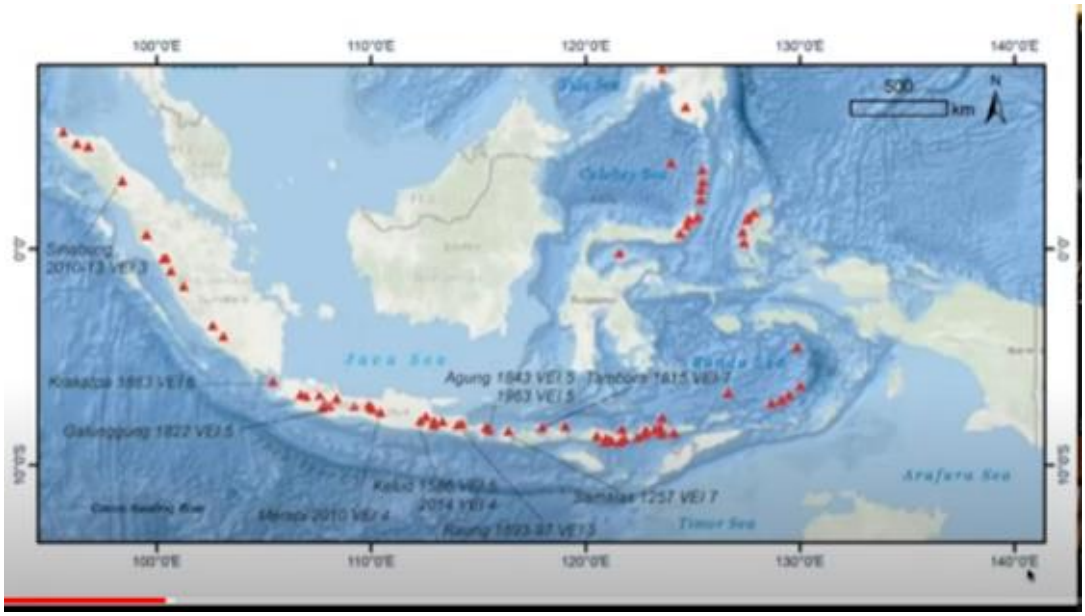
第２回「インドネシアの公害、アートとコミュニティ形成」
【話題提供】
Irwan Ahmett＆Tita Salina（イルワン・アーメット＆ティタ・サリナ）
ジャカルタを拠点に活動するアーティストデュオ。無秩序な都市化 と公害のジレンマに直面する巨大都市ジャカルタの混沌とした公共空間の中に、パフォーマティブな介入を通して想像力を配置する。 アートやアクティビスト界におけるネットワークの発展が、彼らの芸術活動を、より深遠で深い状況へと進展させた。現在、環太平洋 火山帯の地政学的混乱に関連した長期的なプロジェクトに取組中。この地域は自然災害が最も発生しやすく、根強いイデオロギー的暴 力によって引き起こされる心的外傷の影響を受けやすい。その高い移動性を利用して、レジデンスプログラム、リサーチ、フィールドスタディ、展覧会に参加。進化論的 な観点から、人間存在に関する惑星の不安に対する答えを見つけ、不正義、人間性、エコロジーに関連 する芸術を通して知識を生み出す 。

【コメント】
瀬尾夏美
アーティスト。1988 年、東京都生まれ。
土地の人びとの言葉と風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2011 年、東日本大震災のボランティア活動を契機に、映像作家の小森はるかとの共同制作を開始。2012 年から 3 年間、岩手県陸前高田市で暮らしながら、対話の場づくりや作品制作を行なう。2015 年宮城県仙台市で、土地との協働を通した記録活動をする。NOOK（のおく）を立ち上げる。現在は東京で暮らしながら、都内の団地にワークショップスペースの開設準備中。http://komori-seo.main.jp/blog/

武谷大介
学際的アーティスト。トロントと日本を拠点に活動。
“私のアプローチの二重性は、アジアと北米で過ごした生活、批判的な社会問題や環境問題、日本の伝統とポップ、ルネッサンス／バロック絵画の手法やイデオロギーなど、異質で多様な文化的背景が並置され混ざり合った環境を反映している。私の作品は、絵画、パフォーマンスアート、彫刻、写真、インスタレーション、キュレーションの分野を融合させ、創造性、制作、コラボレーションといったプロセスを重視し、文脈や環境に対する理解へのアプローチを試みる”
https://daisuketakeya.com/

【”The Call of Fragility”（脆さの叫び）＿イルワン・アーメット&ティタ・サリナ】

まず、インドネシアの地理を紹介します。地図中の赤い点は火山体、つまりプレートの境界がある場所です。浅い水深でプレート同士がぶつかると、インドネシアの島々に津波が来る可能性があります。インドネシアは津波の常襲地です。



◇脆弱性

インドネシアは自然災害の多い地域です。同時に、美しく、素晴らしい生物多様性を持つ島々でもあります。2 つの側面を同時に持ち合わせていることは、アジア最大の霊長類であるオランウータンの移住が例示してくれます。

ここ 200 万年で最も大きな自然災害が 7 万 4000 年前に起きました。その時に、オランウータンは移住し、氷河期を乗り越えました。その後、人間の狩猟によってジャワ島ではオランウータンが絶滅しますが、ブルネオ、タパヌリ、スマトラの 3 地域のオランウータンが現在も残っています。彼らは親から子へと自然な伝承によって、互いに密接に連関した文化を保っています。

私たちの遠い親戚にあたるオランウータンは、人間のせいで脆い環境にさらされています。しかし、彼らを通して、自然災害と共存する人間の役割について、進化の過程で残ってきた特徴に向き合えると信じています。

◇ジャワ島

1 億 4 千万人が住むジャワ島は、世界で最も人口が密集した島です。そして、インドネシ

アの均衡を保つ役割を果たす重要な地域です。

中央集権化により、人生の命運をかけて非常に多くの人々がジャワ島にやってきました。そうして人々が大都市の居住空間を埋め尽くしたために、都市に負荷がかかり、環境のキャパシティを越えてしまいました。

ジャワ島では主に、沿岸地域では漁業、火山活動によって土の肥えた内陸地域では農業が営まれています。

インド洋に接する南側地域には、険しい岸壁があり、大きな波が打ち寄せます。2006 年には地震と津波に襲われ、600 人の死傷者がでました。地層の隆起によって地域では、ホモ・サピエンスやホモ・エレクトス[1]の化石が発見されました。アフリカ単一起源説[2]によると、ホモ・エレクトスは周囲の環境に影響されて移住・進化しています。
私たちは彼らを、アートグループになぞらえて、”The Extinction collective”（絶滅集合体）と呼びます。地球上では、世界規模の気候変動によって種の絶滅が何度も起きており、気候変動の引き金に最もになっているのは火山噴火だと考えられます。

さて、次は 19 もの活火山があるジャワ島内陸部について話します。昨年、スメル火山という 3600m 級の火山が噴火しました。私たちも村を訪問しましたが、自然災害によって人間の 2 つの側面がはっきりと見えした。1 つは、互いに助け合い、余裕があれば分け与える利他的な側面。もう 1 つは、牧畜を盗む、空き家で泥棒するといった犯罪行為を引き起こす側面です。

最後に、北側地域について話します。ジャワ島北部は、外部からの侵攻に対して重要な役目を果たす場所であり、悲しい歴史をもつ場所です。そして、ヨーロッパによる植民地主義の到来と、先進アジアや中東への季節労働者の供給場所となった頃からずっと闘ってきた地域でもあります。
ジャワ島北部は、海外との窓口であり、産業に適した地域です。しかし、産業のための大規模土地開発によって土地の均衡が崩れ、地盤沈下、海面上昇といった長期的な影響がでています。ここ 10 年ほどで、農地が海に沈み、農家は生活の変容を余儀なくされています。

地盤沈下や海面上昇に対して、それぞれの村の対応は様々です。
Mandalika 村では、すべての住人が移住し、Senik 村では、ひと家族だけが村に残りました。Timbulsloko 村では、記憶を守るために墓地の嵩上げをし、かつての村での日々のルーティ

---

[1] アフリカから移動してきたヒト科。気候変動により絶滅した。
[2] ヒトの祖先はアフリカで誕生し、その後世界各地に伝播していったとする、自然人類学の学説。

ンを行うために村との間に木造の橋を架けました。かつての村との繋がりは、脆弱な状況の中で住人を支えるでしょう。

そして、気候変動と人口過多によるジャワ島への負担削減の最も長期的な戦略として、インドネシア政府は、ジャカルタからカリマンタン東部に首都を移転する計画をしています。しかし、インドネシアは、気候危機の到来を認めていない 8 カ国の内の 1 つであり、インドネシアの人々は環境問題に興味がありません。人々が無関心でいる間に、教育制度や社会規範は物質や金銭の充足を優先させ、人間中心的な姿勢を生み出す傾向がどんどん強まっていきます。

　伝統や文化については、環境に関わるものもありますが、現代の生活には大きな影響はありません。むしろ、祈りの場が水面下に沈みつつあっても、人々は環境を保護する重要性になかなか気づきません。
3 週間ほど前にジャカルタ北部で、海に祈りを捧げ、大漁を願う祭りがありました。しかし、年々漁獲量は減っています。漁師たちが魚を飼育している場所の水が公害で汚染されているのです。

◇作品：”Ziarah Utara”（ジアラ　ウタラ）
　この 4 年間で年に一度ずつ、”Ziarah Utara”（ジアラ　ウタラ）というジャカルタを歩き回るプロジェクトを行ってきました。この巡礼は、視覚的な記録、不法侵入、消えゆく語りを通して、居住不可地域から塀に囲まれた高セキュリティの地域まで、色々な居住地に住む人々の間で、信頼と親密さを築くことを目的としています。この巡礼では、産業により汚染された自然に、参加者それぞれのできる範囲で身体をさらします。

◇作品：”The Call of Fragility”（脆さの叫び）
　ジャワ島北海岸の東側で行った作品、”The Call of Fragility”（脆さの叫び）を紹介します。私たちの旅は、ジャカルタ湾の 5 つの冠水した島から始まりました。海底からの声を集め、私たちの身体の内の流れの変化を感じ、沿岸の産業地帯で燃えさかるにおいを嗅ぎ、政治的対立にさらされた狭い住居スペースに住む人々を見ました。おそらく、私たちに生じた感情は、行き場なく壊れてしまったでしょう。

私たちは、この 10 年で田んぼが海に沈んでしまった空っぽの村に数日間滞在しました。甘い果物のなる木はマングローブに、牛はまずい魚に姿を変えてしまいました。祈りの場所も深いぬかるみに沈み、もはや神に呼びかけることはできません。ただ、コウモリの鳴く超音波の音とコウノトリが巣の場所を取り合って争う甲高い声だけが響きます。

ATM もない。
宅配もない。
ご近所さんもいない。
学校もない。
そこにはただ、いくつかのモスクと嵩上げされた墓地が、記憶を保ち、希望を呼び起こすために残っているだけです。そこには、痛みと脆さが残っています。

声帯と同じように、プレート同士のぶつかる音は断末魔を叫ぶだけでなく、種の進化に大きな影響を与える自然環境の変化を引き起こします。人間の体は地球と同じように、その内部には、声帯を通して不意に爆発したり、静かな心の中で暴れ回ったりする可能性のあるエネルギーを持っています。

では、人間の声には何が起きているのでしょうか？インドネシアでは、人々の声は政治家によって代表されるのではなく、ネットニュースやハッカーのツイート、ヘイトによって表明されます。
アクティビストたちの声が強まればいつも、規範的な道徳によってすぐに沈黙させられるか、プロパガンダによってかき消され、彼らの声は弱まってしまいます。

この作品は、人間は神によって創られたとする宗教と進化論という 2 つの折り合いの悪い思想が交われる点を模索しています。進化論を通じて私たちは、動物的根源により誠実な主張の声を探します。例えば、オランウータンの特定の鳴き声、火山の轟音、超音速ジェット機、生まれたばかりの赤ちゃんの泣き声、沈んだ島の水中の音、沈んだ村の儀式や音を探すのです。

”The Call of Fragility”（脆さの叫び）は仮定であり、道理の実験であり、現在の状況と将来の不確実性をめぐる論理的な試みです。私たちは、脆さを信じることには地球を変える力があると信じようとしています。

◇おわりに
2 週間ほど前に私は、比較的新しく生まれた島を訪問しました。アナク・クラカタウという火山島です。この島の気候と土壌は生命にとって暑すぎますが、一部の場所では、小さな蝶やちょっとした植物があり、自然がうごめいているようです。ここで私たちは、東日本大震災後、放射線の影響を受けた東北の市町村を訪れたときに似た感覚になりました。植物は成長し、風は吹いているけれども、それらの意味は被災した傷とともに変化します。環境は傷よりも早く癒えていきます。

【質問やコメント】

梶原：日本の災害に関する作品では人の声を代弁しているものが多い印象がありますが、お二人の作品は環境そのものの声を擬人化して表現しているように見えました。

イルワン：人間が優先されがちな中で、人間以外の声を録音し、表現することが我々の今回のチャレンジでした。そして、脆さの叫びを集めることで、ジャワ島北海岸の人たちの声を拡声し、パフォーマンスにすることを試みました。

サルやオランウータンには、コールズと呼ばれる能力があります。テリトリーに天敵が入ってきたのを見つけたら、天敵にむかって声を出す。それによって、仲間に危険が伝わって、逃げることができます。これがコールズです。

1883 年に噴火したクラカトワ火山の音は、世界中に振動として伝わるほど大きかったそうですが、火山の噴火の影響で、危機を感じて人々が音を出すこと、羊水に入っている赤ちゃんが肺の中で立てる音にも、助けを求めているような叫び、脆さが感じられ、コールズに近いものがあります。
島は話すことはできませんが、風、そして木が触れ合う音、たくさんの 波が方向を変えながら打ち寄せる音があります。だから、水中に沈んでしまった島の声を聞こうとハイドロフォンを使い録音しました。

人々は、もっと環境全体を見て、この危機を様々な形で注意喚起するべきだと考えます。

武谷：アクティビストが抑圧される状況が続く中で、アーティストの役割・影響力の重要性は高まっていると思います。また、ジャワ島と日本という異なる地域の状況を重ね合わせることで新たな言語を生み出していると感じました。

瀬尾：社会問題が深刻である上に、アクティビストたちの声が抑圧される状況で、アーティストはどんな力や役割をもっていると思いますか？

イルワン：人々は現実から逃げてしまう癖があります。しかし、その現実を私たちの想像力で 覆すことができると思います。
抑圧は内部からも起きるんです。 だから、自己統制を回避するために、いろいろな資料を集め、自分たちの統制や癖を知るようにしています。そして、資料や記録を維持し、次の世代に渡していく。長期的な観点で考えることが重要です。

また、大きな問題や非常に身近な問題を取り上げる時には、多くのことを理解する時間を取る必要があります。そうでなければ、プロセスの中に埋もれ、自分を見失ってしまうからです。

そして、私たちの中にあるモチベーションを維持し、熱意から芸術を作るプロセスを通じて、不確定な将来に何か答えが出てくるのではないかと思っています。

ティタ：1883 年のクラカタウ火山の大噴火について、マレーシアの方が詩をつくっています。噴火がどう起きたか、人々がどのようにパニック状態に陥ったのか、そして人々がどのように互いを助け合ったかが描かれています。噴火から 139 年経ちますが、出来事に対するその人の気持ちや感じた重大さが非常に強力に感じられます。これがアートの機能です。

津波の常襲地や火山の近くに住む人たちは時に、絵や詩、物語を通して出来事を説明するちからを持っています。物語を、世代を通して伝えていくということは、アートであり、文化です。しかし、現代美術においてはこうした表現が過小評価される事があります。こうした表現に対し、真摯に耳を傾け、自然の表現をすくい上げたいと思います。

イルワン：スマトラには虎がいます。だから、スマトラのオランウータンは基本的に木の上に住み、素早く逃げられるように身体が鍛えられ、食にも気を遣っているようです。一方で、虎の居ないボルネオのオランウータンは地上でリラックスして寝そべったり食事したりして暮らしています。このように、深刻な脅威は、異なるメンタリティや文化を育みます。アーティストとして、最も良い方法でそれらを捉えたいと思っています。

林美帆：公害や気候危機についてアートとして伝える中で、鑑賞者からはどのような反応がありましたか？危機の現状には気づくのでしょうか。

イルワン：今回の作品はまだ公開していないので、”Move of Capital”（首都の移動）という以前の作品について話します。政府は、地震の多いジャワ島から、理論的には火山がなく地震が少ないカリマンタンに首都を移すと言っています。カリマンタンはまだ熱帯雨林が存在していますが、ヤシオイルを採る単一栽培の大規模農園が広がる土地になっています。

この作品について、東ジャカルタでは、鑑賞者と面白いディスカッションができました。カリマンタンで何が起きているかは知らなくても、災害を日常的な問題として感じているからです。

私たちのパフォーマンスに来る鑑賞者は、私たちにたくさん質問をくれます。つまり彼らは、政府からのプロパガンダを一方的に信じる人たちではないということです。

ティタ：出来事や問題に対する鑑賞者の気持ちを変えるには長い時間がかかります。大きな変化をもたらすためには小さな行動の変容からスタートしなければなりません。正直、数百人に向かって一方的に話をするより、5〜10 人ほどのグループとの対話のほうが私たちにとっては快適です。例えば一人でもいいから刺激を得て家に帰り、自分の中で一生懸命試行錯誤してくれたら成功だと考えています。

イルワン：カリマンタンのマカハム川には、淡水イルカが生息しています。産業汚染により数が減り、80 匹ほどしか残っていません。私たちは、淡水イルカの高周波の声を記録しようとしています。そうしたものを通して感覚に訴える方が、人間の声や言語よりも影響が大きい場合があります。

編集／井元遥花、瀬尾夏美、梶原千恵